

領域「健康」および領域「人間関係」から見た 体育授業における運動遊びを用いた模擬保育の位置づけ

Utilization possibility of simulated childcare with physical activity play in a physical education class from standpoints of contents of “Health” and “Human Relationships” in childcare curriculum

坂口 将太*

Abstract

This study investigated the relationship between simulated childcare with physical activity play in a physical education class, and contents of “Health” and “Human Relationships” in childcare curriculum. The subjects included 84 females (18–19 years). The criterion used for measurement was the content of a goal in a guidance plan written by students. The results obtained were as follows: the description relating to contents of the “Health” and “Human Relationships” sections was significantly more frequent than contents relating to “Language” and “Expression.” In addition, the number of descriptions relating to contents of “Environment” was significantly lesser than those relating to contents of “Health” and “Human Relationships.”

These results suggest that simulated childcare with physical activity play in a physical education class is a good opportunity to learn about the contents of childcare curriculum, particularly, the contents of “Health” and “Human Relationships.”

キーワード：保育の5領域、教育、保育、保育者養成

I 緒言

保育所、幼稚園および認定こども園において、保育士、幼稚園教諭および保育教諭が保育・教育を進めていく際には保育所保育指針¹⁾、幼稚園教育要領²⁾、幼保連携型認定子ども園教育・保育要領³⁾を基準として教育・保育を進めていくこととなる。そのため、保育者養成校においてはこれらに関する内容について教授していくことが求められている。その中に記載されている保育の内容については、保育所保育指針解説書⁴⁾において、保育士等が適切に行う事項及び保育士等が援助して子どもが乳幼児期に育ち経験することが望まれる事項として、養護と教育に関わるねらい及び内容が示されている。特に、教育に関わる内容は、「健康」、「人間関係」、「環境」、「言葉」および「表現」の5領域に分類されており、幼稚園教育要領解説⁵⁾および幼保連携型認定子ども

園教育・保育要領解説⁶⁾において、各領域に示されている「ねらい」は幼稚園生活の全体を通して幼児が様々な体験を積み重ねる中で相互に関連をもちながら次第に達成に向かうものであり、「内容」は幼児が環境にかかわって展開する具体的な活動を通して総合的に指導されなければならないものであると示されている。これらのことから、保育・教育における様々な活動に5領域を組み込んでいく必要があり、保育者養成校においても5領域についての授業だけでなく、様々な授業で5領域に関する内容と連携して教授していくことが求められる。

学生が授業において学習を進めていく上で、それまでに学習した内容を活用したり、自身で考えたりして主体的に学習を展開していく方法の一つとして模擬保育が挙げられる。模擬保育は、学生同士が保育者役と子ども役に分かれて、設定した内容で実際に保育を進めていく。実施するにあたって、事前に

* Shota SAKAGUCHI 聖和短期大学 専任講師

1) 厚生労働省 2008 保育所保育指針

2) 文部科学省 2008 幼稚園教育要領

3) 内閣府 2014 幼保連携型認定子ども園教育・保育要領

4) 厚生労働省 2008 保育所保育指針解説書

5) 文部科学省 2008 幼稚園教育要領解説

6) 内閣府 2014 幼保連携型認定子ども園教育・保育要領解説

どのような保育を展開していくか、必要な物は何かを自身で考え準備していくため、主体的な学習が期待できる活動であると言える。また、学生が保育実習や教育実習に参加する前段階で保育の一端を経験できることも模擬保育を行うことの利点となる。

一方で、教員がどのような模擬保育を設定するかによって、学生の学習内容が大きく変化することが考えられる。模擬保育の内容を設定するにあたって子どもの活動に着目すると、子どもが幼稚園、保育所、認定子ども園等で生活を送っていく中で大きな割合を占めているのは様々な遊びである。子どもは、遊びを通して多くのことを学んでいく。そのため、保育者は遊びの内容と子どもの成長との関係を考慮して保育を進めていくことが求められる。これらのことを踏まえると、模擬保育のテーマに遊びを用いることは、学生が子どもの成長を考慮して保育を展開していくことを考える上で非常に良い題材になると考えられる。

子どもが行う遊びについて、幼児期運動指針⁷⁾によると、幼児期における身体を動かす遊びや適切な運動は単に運動能力の発達を促進させるだけでなく、将来における健康の基盤や意欲的な心、社会性を身に付ける上でも非常に重要であると示されている。つまり、運動遊びを実施することは領域「健康」だけでなく、領域「人間関係」に関わる内容を子どもに経験させることができると考えられる。これらのことから、運動遊びを用いた模擬保育を実施することは、子どもが領域「健康」および「人間関係」に関する内容を体験する過程について、学生が学習するための良い機会になると考えられる。

そこで、本研究は運動遊びを用いた模擬保育の内容と領域「健康」および「人間関係」の関係性について検討し、領域「健康」および「人間関係」に関する内容を学習する上での運動遊びを用いた模擬保育の位置づけを明らかにすることを目的とした。

II 方法

1. 対象グループ

対象は、保育を専攻する女子短期大学生で「体育」の授業を受講していた2クラス84名（1クラス42名）であった。3～5人を1グループとしたグループを作成し、計21グループを調査対象とした。

2. 模擬保育について

模擬保育は、保育者養成校である短期大学内において開講された「体育」の授業の中で実施した。学生には、初回の授業においてオリエンテーションを行い事前に体育館にて学生が主体となって進める模擬保育を実施する旨を伝え、指導案および準備物を作成するよう指示した。

模擬保育の設定は、3～5人1グループで年中または年長を対象とした運動遊びとした。実施時間については、授業内の30分間を模擬保育の時間として各グループ共通で設定した。

3. 調査項目および調査方法

模擬保育を実施するにあたって、保育者役を担当するグループに対して事前に保育指導案を提出させた（図1）。保育指導案は、「本時の内容」、「本時のねらい」、「準備物」、「本時の展開」から構成されていた。本研究では、その中の「本時のねらい」を調査対象とした。「本時のねらい」に記載された内容を、領域「健康」、「人間関係」、「環境」、「言葉」および「表現」の5領域に分類した。分類するにあたっては、幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定子ども園教育・保育要領に記載されている各領域のねらいおよび内容を元に分類を行った。なお、どの領域の内容にも当てはまらない記述は認められなかった。

4. 統計処理

指導案中の「本時のねらい」において、記載された内容に偏りがあるかを調査するために記述内容の分類と記述の有無についてのクロス集計表を作成し、 χ^2 検定および残差分析を行った。また、記述内容の分類間における記述数の有意差検定にはKruskal-Wallis検定を行い、Bonferonni法を用いて多重比較を行った。統計処理には全てSPSS ver. 24.0 (IBM社製)を用い、有意水準については危険率5%未満を有意とした。

III 結果

「本時のねらい」における記述内容の偏りについて、記述内容の分類と記述の有無に関するクロス集計表を作成し、 χ^2 検定ならびに残差分析を行った（表1）。その結果、記述内容の分類間における記述

7) 文部科学省 2012 幼児期運動指針

組（年中・年長） 保育指導案

日 時：平成 年 月 日（ ）第 限
 グループ名：
 場 所：

(1) 単元名

(2) 本時のねらい

(3) 準備・資料等

(4) 本時の展開

時間	幼児の活動	環境構成, 保育士の援助, 注意点

図1 保育指導案の書式

の有無の偏りは有意に異なることが明らかとなった ($\chi^2=50.471, p < 0.001$)。残差分析を行った結果、領域「健康」および「人間関係」に関する記述が有意に多いことが認められ、領域「言葉」および「表現」に関する記述が有意に少ないことが明らかとなった。

次に、図2に各保育内容に関する記述数の割合についての円グラフを示した。記述内容の分類間における記述数の有意差について、Kruskal-Wallis 検定を行い、分類間の比較において Bonferonni 法による多重比較を行った。その結果、領域「健康」に関する記述数と「環境」、「言葉」および「表現」に関

表1 指導案におけるねらいの記述内容についてのクロス集計表

記述の有無		記述の分類					計
		健康	人間関係	環境	言葉	表現	
記述無し	観察度数	6	5	17	21	20	69
	調整済み残差	-4.0*	-4.5*	1.6	3.7*	3.2*	
記述有り	観察度数	15	16	4	0	1	36
	調整済み残差	-4.0*	4.5*	-1.6	-3.7*	-3.2*	
計		21	21	21	21	21	105

* : p < 0.05

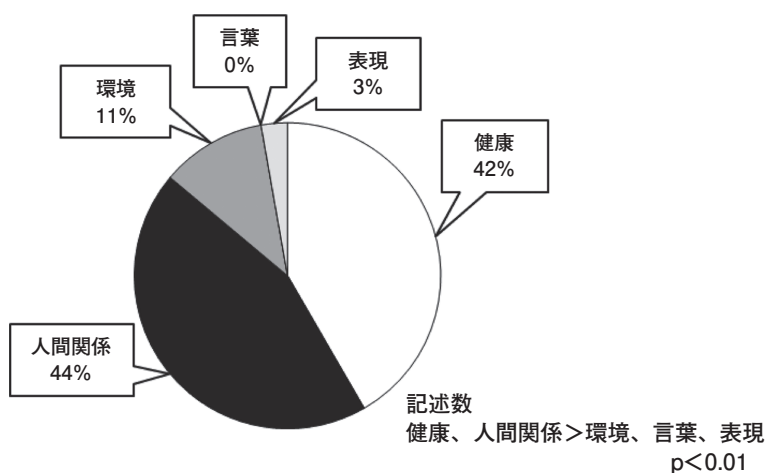


図2 記述内容の割合

する記述数との間、領域「人間関係」に関する記述と「環境」、「言葉」および「表現」に関する記述数との間に統計的有意差が認められた ($\chi^2 = 49.990$, $p < 0.001$)。

IV 考察

本研究の目的は、幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定子ども園教育・保育要領に記載されている領域「健康」および「人間関係」の内容を学ぶ上で運動遊びを用いた模擬保育がどのように関係しているかを検討することであった。

「本時のねらい」における記述内容について、 χ^2 検定の結果から記述内容に有意な偏りが認められた ($\chi^2 = 50.471$, $p < 0.001$)。残差分析を行った結果、領域「健康」および「人間関係」に関する記述内容が有意に多く、領域「言葉」、「表現」に関する記述が有意に少ないことが明らかとなった。これらのことから、本研究で対象とした学生は、運動遊びを用いた模擬保育を実施するにあたって領域「健康」だけでなく、領域「人間関係」についても着目していたことが示唆できる。このような結果となった背景

として、本研究で対象とした模擬保育の設定が大きな影響を与えていると考えられる。今回対象とした模擬保育は、3～5人が1グループとして保育者役となり、残りの37～39人の学生を子どもに見立てて運動遊びを実施するものであった。幼稚園教育要領、保育所保育指針および幼保連携型認定子ども園教育・保育要領の領域「健康」のねらいと内容の中に「自分の身体を十分に動かし、進んで運動しようとする。」や「いろいろな遊びの中で十分に体を動かす。」といった項目が記載されている。今回実施した模擬保育は運動遊びを用いたため、指導案の「本時のねらい」が領域「健康」に記載されているねらいや内容と直接的に結びついたと考えられる。また、37～39人の学生を子ども役として保育を進めていくことから、子ども役の学生同士が協力して助け合ったり競い合ったりするような活動が多く見られた。領域「人間関係」のねらいおよび内容の中には、「友達の良さに気づき、一緒に活動する楽しさを味わう」や「友達と一緒に活動する中で、共通の目的を見だし、協力して物事をやり遂げようとする気持ちを持つ」といった他者と関わることに

る内容が示されている。今回、保育者役を担当するグループは多人数の子ども役を保育することになってきたため、模擬保育をスムーズに進めていく上で子ども同士が協力して行う活動が非常にイメージしやすかったと考えられる。そのため、今回の指導案の「本時のねらい」に領域「人間関係」に関する記述内容が多く認められたと考えられる。さらに、遊びの形態は「一人遊び」から始まり、「平行遊び」、「連合遊び」を経て「協同あるいは組織的遊び」の順に発展することが報告されている⁸⁾ (Parten and Newhall, 1943)。つまり、遊びは一人から多人数への関わりのある活動へと変化していくものであると言える。加えて、子どもにとっての遊びは、余暇としての意味合いが強大人の遊びと異なり、生活の中で様々な事柄を学ぶといった学習の機会としての意味合いが大きい。これらのことから、遊びを用いた模擬保育において、領域「人間関係」のねらいや内容が「本時のねらい」に含まれることは必然であったとも考えられる。加えて、「本時のねらい」における各領域に関する記述数について、領域「健康」と「人間関係」との間に有意差が認められていないことから、運動遊びは領域「健康」だけでなく、領域「人間関係」のねらいや内容も包括して進めていくことができる活動であることを示唆している。これらのことを踏まえると、運動遊びを用いた模擬保育は、学生に対して単に領域「健康」に関する事項だけでなく、他の領域、特に「人間関係」に関する事項についても学習する機会を与えることができると考えられる。

一方で、「本時のねらい」において、領域「言葉」および「表現」に関する記述が有意に少ないことが明らかとなった。領域「言葉」については0件、領域「表現」については1件であった。加えて、記述件数については、領域「環境」と領域「健康」および「人間関係」との間に統計的有意差が認められた。これらのことから、運動遊びを用いた模擬保育において、領域「環境」、「言葉」および「表現」は運動遊びを用いた模擬保育の指導案に組み込むことが難しいことが示唆された。その背景として、本研究で対象とした学生の影響があると考えられる。今回の模擬保育は、1年次生対象で秋学期に開講された授業の中で実施された。つまり、保育に関する学習を

始めて日が浅く、専門的知識や技能を十分に学習できていない状態での模擬保育であったと推察される。そのため、上述した3つの領域と今回の模擬保育を関連付けて実施することは、思いつきにくかったと考えられる。これらのことから、「本地のねらい」における領域「環境」、「言葉」および「表現」に関する内容が少なくなったと考えられる。一方で、今回の指導案の中に領域「環境」および「表現」に関する内容を組み込んでいるグループも存在した。このことから、今後、知識や技能を学んでいくことによって領域「環境」や「表現」の内容を含んだ運動遊びを提案できるようになる可能性が考えられる。また、話すことや聞くことは、子ども同士が意思疎通を図る上で基本的な事柄であると言える。そのため、運動遊びの中にも言葉を交わすような場面やイメージを言葉にするような場面を設定していくことで領域「言葉」の内容を組み込んでいくことができると推察される。

以上のことから、運動遊びを用いた模擬保育は、学生が保育の5領域、特に領域「健康」および「人間関係」に関する内容を総合的あるいは包括的に組み込んで学習できる活動であることが示唆された。他の授業においても、保育の5領域と連携させて授業を展開することは十分可能であり、それらは質の高い保育者を養成していく上で非常に重要である。そのためには、各授業において、教員が保育の5領域とどのように関連付けられるかを検討して授業を展開していく必要があると考えられる。

V 要約

本研究では、保育者養成校である短期大学の女子学生84名を3～5人1グループで分類した21グループを対象にして、領域「健康」および「人間関係」の内容に対する運動遊びを用いた模擬授業の位置づけを明らかにするために、体育授業における運動遊びを用いた模擬保育と領域「健康」および「人間関係」に関わる内容との関係性について検討した。模擬保育の指導案の中に記載されている「本時のねらい」の内容を保育の5領域である「健康」、「人間関係」、「環境」、「言葉」および「表現」に分類し、その記述頻度について χ^2 検定および残差分析を行った。その結果、領域「健康」および「人間関係」に

8) Parten, M. & Newhall, S. M. 1973 Social behavior of preschool children. In R. G. Barker, J. S. Kounin & H. F. Wright (Eds.) Child behavior and development. New York: Mcgrow-Hill.

関する内容が有意に多く、領域「言葉」および「表現」に関する内容が有意に少ないことが明らかとなった。加えて、記述数の比較について、Kruskal-Wallis 検定および Bonferonni 法による多重比較を行った結果、領域「健康」および「人間関係」に関する記述数が領域「環境」、「言葉」および「表現」に関する記述数よりも有意に多いが認められた。

これらの結果から、運動遊びを用いた模擬保育は、学生が領域「健康」および「人間関係」に関する内容を学習する上で非常に有益であることが示唆された。

参考文献

- 厚生労働省（2008）保育所保育指針
- 厚生労働省（2008）保育所保育指針解説書
- 文部科学省（2008）幼稚園教育要領
- 文部科学省（2008）幼稚園教育要領解説
- 文部科学省（2012）幼児期運動指針ガイドブック
- 内閣府（2014）幼保連携型認定子ども園教育・保育要領
- 内閣府（2014）幼保連携型認定子ども園教育・保育要領解説
- Parten, M. & Newhall, S. M. (1973) Social behavior of preschool children. In R. G. Barker, J. S. Kounin & H. F. Wright (Eds.) Child behavior and development. New York: Mcgrow-Hill.